

角笛吹く子

小川未明

青空文庫

まちの四つ角に立つて、一人の男の子がうろうろしていました。子供ははだしで、足の指を赤くしていましたけれど、それを苦にも感じないようでありました。短い黒い着物をきて、延びた頭髪は、はりねずみのように光っていました。

子供は、このあたりのものではないことはよくわかっています。前には、こんな子供がこの付近で遊んでいたのを、だれも、見たものがないのでありません。きつとどこかからやってきて、帰る途を迷ったにちがいありません。けれど、なかなかきかぬ気の子供は、それがために、けっして泣き出すようなことがなかったのです。

町には、もう雪がたいてい消えかかっていますけれど、なおところどころに残っているのが見えました。子供は、車がいったり、きたりしますのを目を円くして、おびえながらながめていましたが、あまり自分に注意をする人もありませんので、やっと安心したように、いくらかおちついたらしいようすでありました。ちようど山がらが里に出てくると、里に棲んでいる、たくさんの中から、たかつていじめられるように、子供には、町を通る人間が怖ろしかったのです。

だれも、自分に気を止めるものがないと知ると、子供は、そのそばにあった時計屋の店さきにゆきました。その店には、ガラス戸の内側に、宝石の入った指輪や、金時計や、銀の細工を

したえり飾りや、寒暖計や、いろいろなものならが並べてありましたが、中にも、一つのおもしろい置き時計が目立っていました。

それは、ふくろうの置き時計で、秒を刻むごとに、ふくろうの眼球めだまが白くなったり、黒くなったりしたのです。

そして、時計の針はりが白い盤ばんの面おもてうらを動ごいていました。そのときはまだ、昼前ひるまえでありましたが、著いちじるしく日ひの長ながくなつたのが子供こどもに

も感かんじられました。

みなみほうそらのいろ
南みなみの方ほうの空そらの色いろは、緑みどり色いろにうるんで、暖あたたかな黄こがね金色いろの日ひ
の光ひかりは、町まちの中なかに降ふつてきました。それを見みあげると、子供こどもは、いつかこの町まちを通とおつたことがあつたのを思おもい出だしました。そのとききは、雪ゆきが盛さかんに降ふっていました。北風きたかぜがヒューヒューと鳴なつ

て、町まちの中なかは、晩方ばんがたのように、うす暗くらかったです。日ひが短みじかく
て、時計とけいの針はりが、白しろい盤ばんをわづかばかりしか刻きざまないうちに、も
う日ひが暮くれかかるのでありました。

人々ひとびとは、みんな吹雪ふぶきの音おとに脅おどかされて、身みをすくめ町まちの中なかを

歩あるいていました。じきに暗くらくなると、どこの家いえも早はやくから戸とを閉し

めてしまつて、町まちの中なかは死しんだようになりました。その後あとは、ま

つたく風かぜと雪ゆきの天地てんちで、それはたとえようのないほど、盛さかんな景け

色しきでありました。子供こどもはそれを忘わすれることができなかつたのです。

子供こどもは、こうした吹雪ふぶきを見るみのが大だい好きすでした。そして、黄こがねい金い

色いろの日ひの光ひかりを見みると、不ふ思議しぎに気き持もちが悪わるくなつて、頭ずつう痛いたがし

たのであります。

子供は、ふくろうの眼球が、白くなったり黒くなったりするのを、もう見飽きてしまいました。そして時計屋の店さきを離れますと、また、どっちへ歩いていっていいかわからずに、うろろうとしていたのであります。

いくら気の強い子供でも、いまは泣き出しそうな顔つきをせずにはいられませんでした。

どっちへいったら、自分の家へ帰られるだろうかと思つたのです。

このとき、あちからから、真っ黒の頭巾を目深にかぶつて、やはり黒い着物をきた、おばあさんがつえをついて歩いてきました。そして、町の四つ角に、ぼんやりと立っている子供を見つけます。

と、

「おまえは、こんなところにいたのか。」といつて、子供の着物のそでを引ひ張りました。

「おばあさん、もう家へ帰りたいたい。」と、子供は泣きだしそのような声でいいました。

「ああ、帰ろうと思つて、おまえをさがしていたのだ。」と、おばあさんは答えました。

子供は、黙つて、はだしのままおばあさんに連れられて、田舎の舍路の方をさして歩いてゆきました。

あちらの森では、からすがやかましくなっていました。

「ほんとうに、やかましくからすがないている。あれは、きつと

里さとのからすだ。私わたしたちをみつけて、鳴ないているのだ。山やまがらすな
らあんなになきはしない。」と、おばあさんはいいました。

「おばあさん、からすが怖いよ。」と、子供こどもは泣なきだしそうな声こえ
でいいました。

「ばかな子こだ。そんな弱よわいことでどうする。からすがきたら、私わたし
がつえでなぐつてやる。」と、おばあさんは答こたえました。

子供こどもは、からすのいない森もりの方ほうを振り向むきながら、おばあ
さんさんに連つれられてゆきました。

村むらにさしかかると、まだ田たにも圃はたけにも、雪ゆきがところどころ残のこつ
ていました。町まちよりは雪ゆきが多おほかったです。そして、村むらの子供こどもら
が、雪ゆきの消きえた乾かわいた往おう来らいで、こまをまわしたり、鬼おにごっこを

したりして遊あそんでいました。

その子供こどもらの声こえを聞ききつけると、子供こどもは、怖おそろしがって足あしがすくんでしまった。

「おばあさん、みんながいじめめるから怖こわいよ。」といって、子供こどもは、前まえへ歩あるこうとはしませんでした。

おばあさんは、当とう惑わくそうに子供こどもの手てを引ひきながら、

「先さきがなんというても、おまえは黙だまっていればいい。もし、あの子供こどもらが口くちでいうばかりでなく、おまえをなぐるようなことをしたら、私わたしが、このつえでそいつをなぐってやる。」と、おばあさんはいいました。

子供こどもは、おばあさんの蔭かげに隠かくれて、みんなの遊あそんでいるそばを、

逃にげるようにしてゆきすぎました。

「やあい、どこかの弱よわむし虫め、やあい。」と、後ろうしの方ほうで子供こどもらが悪わるくち口くちをいいました。

「弱よわむし虫のくせに、はだしでゆくやあい。」と、また子供こどもらがい
いました。

おばあさんの蔭かげに隠かくれて、子供こどもは耳みみの根ねまで真まつ赤かにしながら、
黙だまつて、恥はずかしがっていました。

「おまえは、いい子こだ。よく黙だまっていた。それでこそおまえは、
ほんとうに強つよい子こなんだ。」と、おばあさんは、強つよいけれど、ま
た一面めんには臆おくびよう病びようなどところのある子供こどもの頭あたまをなでていいました。

二人ふたりは、さびしい、あまり人ひとの通とおらない田舎路いなかみちを、どこまで

もまっすぐに歩いて歩いてゆきました。すると、あちらから、一人の百姓が、二頭の羊を引いて、こちらにきかかりました。これを見ると、子供は、また、怖ろしかりました。

「おばあさん、怖い。」と、子供は泣き声を出していいました。

「なにが怖いことがある。あれは羊だ。草を食べさせに百姓がつ

れてゆくのだ。よけてやれば、おとなしく前を通つてゆく。」と、

おばあさんは答えました。

路の両側には、雪が消えかかつて、青い草の出ているところ

もありました。けれど、だんだんと進むに従つて、雪は多くな

つたのであります。

おばあさんと子供は、路の片端によつて、百姓と羊を通して

やりました。

二頭の羊は、仲よく並んで前を過ぎました。後から百姓がゆき
ました。

「これから先は、だんだん雪が深くなるばかりだ。」と、百姓は
通り過ぎるときに、二人に向かつて知らせました。

二人は、また、その路を北へ、北へと歩いてゆきました。やが
て、路は、広い野原の雪の中につづいていました。広い、広い、
野原はまったく白い雪におおわれています。子供はその雪の中を、
元氣よくおばあさんの先に立つて、はだしで進みました。

北の地平線は、灰色に眠っていました。まだ、そこには春
はきていかなかった。

「おばあさん、もう家が近くなつた。」と、子供はいいました。

「ああ、もうここまですればだいじょうぶだ。」と、おばあさんも答えました。

このとき、子供は、懐の中から角笛を取り出しました。そして、北の野原に向かつて、プ、プー、プ、プー、と吹き鳴らしたのです。すると、たちまち、無数のおおかみが、どこからか群れをなして、雪をけたつて駆けてきました。子供は、その中の一頭に早くも飛び乗りました。そして、南の空を見返りながら、太陽に向かつて威嚇しました。すると無数のおおかみは、等しく太陽に向かつて、遠ぼえをしたのであります。その声は、じつにもものすごかつた。広野に眠っている遠近の木立は、みんな身

震ふるいをしました。

寒さむい風かぜが急きゆうに北きたの方ほうから起おこつてきて、雪ゆきがちらちらと降ふつてきました。見みると、さつきまで、つえをついて、黒くろい頭ずきん布ぶをかぶつていたおばあさんは、じつは魔物まものであつたのです。黒くろい頭ずきん布ぶと見みえたのは、大おおきな翼つばさをたたんで、その頭あたまを隠かくしていたからです。たちまち、魔物まものは、大おおきな翼つばさを羽はばたいて、大空おおぞらに舞まい上あがりました。子供こどもが角つの笛ふえを吹ふいて、北きたへ北きたへと、おおかみの群むれとともに駆かけ去さる頭あたまの上うへの空そらには、黒くろ雲くもがわいて、雷かみなりがとどろいていたのであります。

南みなみの空そらからはしきりに、金きん色いろの箭せんが飛とんできました。けれど、ここまで達たつせずに、みんな野原のはらの上うへに落おちてしまいました。する

と、そこには、雪^{ゆき}が消^きえて、下^{した}からかわいらしい緑^{みどり}色^{いろ}の草^{くさ}が芽^めをふきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「童話」

1921（大正10）年3月

※表題は底本では、「角笛《つのぶえ》吹《ふ》く子《こ》」
なっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

角笛吹く子

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>